

風と共にあれ

ネマ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『お前は転生ね。あ。2つ恩恵はつけとくから。』

と言われ目が覚めたら、まだ人類の歴史が出来上がる前の世界だった!!

そこから数千……億年と言う年が過ぎて今回も中々曲者な世界の様で……!!

デート・ア・ライブ 風と共にあれ。始まります!!

目次

first	1
十香コネクション	9
恭夜エキスパネーション	16
十香アンド恭夜リンク	22
恭夜フアンタジア	29
十香デート	37
恭夜エンジェル	43
十香ハッピーエンド	49
十香デットエンド：裏	58

f i r s t

「……………」

ザッザッザッ。

砂漠をひたすらに歩く。

まるでムスペルヘイムの如きの灼熱と、太陽が照りつけるが原点のスルトの方が熱かったかと、苦笑する。

……何日歩いただろうか。

最早数えることすら億劫に成る程歩き続けた気がする。

メソポタミアのウルク。イスラエルのイエルサレム。北欧のヴォルフルガンク・サガ。ローマの王。ブリテンの騎士王。アツティラ・ザ・フンの文明の破壊者。

……かつて神が全てを統べ、始まりの神が跋扈している世界から私はその生を繋いでいる。

『お前は転生ね。あ。2つ恩恵は付けとくから。』

そう言われて、苦情を告げる間も無く私は、不毛の大地に立っていた。

そこには龍が覇権を競い、神が世界のテクスチャを作り領土を奪い合ういわば、”人類創成前の地球だった”。

人は神に、力有るものに乞い1日を生きていた。

私が最初に崇めた”ティアマト様”も痲癩さえ有れど心優しく人の痛みにすら涙を流す優しい女神様だった。

同じ様に崇めていた”アプスー様”も多少頭痛でイライラしていた時も有ったが信者には優しく笑っていた理想の神だった。

それでも終わりの時が来る。

私は、特異な魂を持つ人としてアプスー様にもティアマト様にも気に入られていた。ちょうどその時は産んだ息子、娘達の馬鹿騒ぎに苛立っていたが私が献上するフルーツ等で少しは怒りが治まっていると思いたい。

ある時、息子である”エア様”にアプスー様は騙され殺されてしまう。

ティアマト様もそれを知ってか（殺されるまで知らなかった）聞かせていただいた唄には悲しみが混じっていた。

だが息子、娘達はそれだけでは飽きたらずまさかのティアマト様にも刃を向けた。

勿論私もティアマト様も怒り狂い、ティアマト様は海水の権能全てを使い十一もの魔獣を持って若い神に戦いを挑んだ。

私も、信仰とお供えとそれに気に入られている事も有ってか神代のそれも始まりの魔術のさらに前の権能と言われるレベルのまさに”魔法”を教えてもらっていたからそれを使ってティアマト様を最大限バツクアップした。実際前線に出たことも有る。

それでもティアマト様は敗れ、私が最後に見たのは、確実に敗れると察したのでろう。海水の権能によって私が封じ込められていた時にはもうマルドゥーク神がティアマト様を天と地に引き裂かれた後だった。

私は、その後マルドゥーク様に捕まり後の余生は若い神を信仰するようにされてしまった。

次に目を覚ましたのは、ギリシャのそれもまたクロノス様の時代だった。

この頃になってようやく私は自分の転生特典に気がついた。

転生特典は言われた通りに2つ。

『無限転生』と『完全記憶』

だと思う。

もしかしたら、『完全記憶』では無く、”あらゆる魔術の使用”なのかもしれないが、過ぎた話だ。

まあクロノス様は、父殺しによって最高神の位を受け継いでおり、いずれ自分の息子に同じ様に位を奪われるだろうと言われていた。

だから、どれほど傲慢に人に接していてもその中は恐れと不安を抱いていたと思う。

それでもクロノス様には終わりが必ず来てしまった。

最後にもう逃げられないと悟りゼウス様に微笑んだのは父親としての最後の愛情だったのだろうか。

その後、私は色々な物語を見た。  
始まりの黄金にして偉大なる王。

愛によって死んだ北欧の英傑と戦乙女。

半神と言う立場で有ろうとも自らを犬と定義した英傑。

それはいたいけな優しい褐色の少女が歪められ男として終わりを  
迎えた英傑。

咎を背負いながらも、十二の難題をやり遂げた英雄。

常勝の王で合ったけど、その心は本来なら優しい騎士王。

ここで語るなら時間が足りなくなるような、時間を英傑と英雄と過  
ごしてきた。

……ああ。もう時間だろう。

神代に産まれることは無い。

ギルガメツシュ王がまず天と地の楔を切り落とし、信仰心の欠けり  
により、もう神はこの世界に降りることは無いだろう。

私が居る袋はもう縮み始めている。

私とその世界に産まれるのだろう。

ああ。ジャツクは、あの憐れな水子霊達は報われたのだろうか。

産まれる前はこんな事を考えるなんて縁起が悪いぞと誰かに笑わ  
れた気がする。

……誰だったのだろうか。

オギヤアホギヤアオギヤア!!

……口から意識しずとも出る泣き声。

産まれて初めて酸素を吸い始めた。

……いやまあ。こうやって生まれたのは数えきれないが。

「産まれたのか!!」

「ええ。あなた。可愛い可愛い男の子ですよ。」

—————

「……………」

「お兄ちゃん！起きてー!!もうあの二人来てるよ?」

「……………はいよ。先行つといてって言って。」

「は————い！」

目が醒めた。

久しく、夢を見ることは無かったが、久しぶりに記憶のフィードバックが来たらしい。

目を擦りながら、服を着替え制服とやらを着る。……ここ数年を見るところに大分世界は変わってしまった。

かつて麻で編んでいたのが毛糸になり、綿や絹となり、今は人工的に素材が作られている。

人は進化した。もはや神の手を借りず、進化し過ぎた。

あの頃、神獣が跋扈し私達が命を掛けて生き、駆け抜けたあの頃が懐かしく哀愁が沸く。

「……………行くか。」

リビングに降りると、妹と幼馴染の双子が、テレビを見ていた。

「……………なにやってんの？」

「……………テレビ見てる？」

「回答。テレビを見ている？」

……………どうやら聞いた私が馬鹿だったらしい。

とりあえず家族の紹介をしよう。

ほぼ居候と化している八舞耶俱矢と八舞夕弦だ。

私はまとめて八舞姉妹と読んでいるが。

何でこの二人が居候と化しているかと言うと……

簡単に言うと、拾ったのだ。空腹で倒れている所を。

そしたら懐かれてしまって、このままと言うわけだ。

……………実際。この姉妹が純正の人間では無いことは察しているし知っている。

まあこの種族に名前を付けるのなら”デミフェアリー”辺りが順当だろう。

その力は幻想種のフェアリーでは無く、拳大の結晶。それが、精霊の力の元らしい。

そしてこの結晶には面白い能力が付与されていて、……………そうだな名前を付けるのなら”模造天使”だろうか。

中に刻まれている能力は”風を操る事”。

神造兵器の世界を繋ぐ錨程の威力は出ないだろうが、魔術で起こした風とは大きな差が出るほどだ。

……………え？親はどうしたかって？まあ、あれだよ。あれ。星の形になったのさ。

「…うむ！相変わらず恭夜のご飯は美味しいな!!」

「同感……和洋中全て完璧に作れるのは感動します。」

まあ。遙か昔からの年の瀬だろう。

一応、ある程度有名な所のご飯は作れる。

「……………それで。今日はどうするんだ？八舞姉妹。？」

「……………恭夜は学校だろう？」

「まあ今日は休めないからな。」

「疑問。なぜでしょうか？」

「ああ。……………今日はクラス換えの日だからな。」

「理解。それじゃあ、もう家を出る？」

「ああ……………もうこんな時間か。行ってくる。」

「……………行つてらっしゃい〜」

八舞姉妹は……………知らないがまあ何かしらしてまた渡り鳥の宿り木の如くあの家に来るだろう。

「おはよう！恭夜！」

「……………ああ。おはよう。土道。」

後ろから来たのは、長い青髪を無造作に括って、人当たりがよさそうな笑顔を向けた少女だった。

「どうした？そんなに、疲れたような空気を出して。」

「……………え？実は……………」

どうやら土道が言うには、朝起きたら土道の妹である琴里が腹の上においてサンバを踊っていた……………らしい。

「まあ良いじゃないか。仲良くて。大目に見てやれよ……………」

「まあそのつもりだけどさ……………もう少し起こし方よ……………」

少しブツクサ文句を言いながらも学校に着いた。



「……………2年4組か。」

「…恭夜はどこ?…あつ!一緒じゃん!!」

教室に入り、黒板に張られている座席表を見る。

「……………時雨恭夜。」

突然、後ろから名前を呼ばれ振り向くと、そこには銀髪の髪を肩辺りまで伸ばした無表情の少女が立っていた。

「……………誰?」

「知り合いじゃ……………無さそうだね。」

実際、今世の記憶上にこの少女の顔は無い。

「覚えてないの?」

「……………すまん。さっぱりだ。」

「……………そう。」

一言呟くと、自分の席に座って本を読み初めた。

「とうっ!!」

後ろから、背中を軽く叩く感じがして後ろを振り向くと、少年が立っていた。

「……………何の様だ?殿町?」

「お前……………いつの間に鳶一と仲良くなりやがった!」

「……………鳶一?」

「今さっきの子だと思うよ?恭夜?」

「……………そうなのか?殿町?」

「どうやら今さっきの少女は”鳶一折紙”学年首位で全国模試一位、体育も優秀であげくのはてには美人で恋人にしたいランキング・ベスト13で3位らしい。」

「……………3位ねえ。と言うか13位とは随分と中途半端な」

「魔術……………と言うかこちら側の世界では、13と言うのはもつとも重要な数字の一つでもある。」

「と言っても聖堂協会の方が重要にしている。神の子キリストの13番目の弟子そしてキリストを裏切った神の子を殺す直接の原因である”ユダ”を意味する。」

その為、13とは”奇蹟”を阻害する等とある。

洗礼詠唱等は、これで塞いだりする事は出来なくはない。

……まあ。もつとも圧倒的、魔術で先に口を封じた方が早い。

「主催者が13位だったんだよ。」

「成る程……」

「ちなみに男子はベスト358まで発表だ」

「そこまで明かす必要はあったか？」

「ちなみに恭夜お前は4位だったぞ？」

「ふうん……でお前は？」

「358位だが？」

「主催者を把握出来たな。」

軽口を叩きあっていると、教室のドアが開き教師が入ってきた。

今年の担任は岡峰珠恵、通称タマちゃんが担任となり始業式も無事終わる。

そしてショートタイムが終わり、全員解散となった頃……

(……………?マナの歪みがひどい?)

ウウウウウウウ

「……やれやれ。空間震か」

空間震、空間の地震と称されている。現在起こる理由に発生時期不明とよくわかっていないもの。しかしシエルターに避難すれば問題ない。しかもここは学校、地下にシエルターが完備されているのになにも問題ない。

魔術的観点から見るところ。”何か”が顕現したかのような……

それこそ神霊級には及ばないが、幻想種のような何か”世界の裏側

”から来たような……って

「おいっ！五河どこに行くんだ!?!」

「……ちよつと用事!!」

本来、避難しなくてはならない現状だが、土道はまるで関係無いような感じで走り去っていく。

「……………っく。殿町。あいつを連れ戻してくる。先行ってろ。」

返答は聞かず、追いかけて走ってく。

「ボソツ……Im Laufe der Zeit folge  
ir und versammle dich bei mir」

”時の流れよ我に従い我に集え”。

かの有名な魔術師殺しのエミヤの術式に似た。自分と世界の時の流れを弄り、自分を速くしたり遅くしたりと自由に操れるから気に入っている術式だ。

因みに、これは抑止力案件では有るが、”何故か”今世では弱体化していない。

……これぐらいなら”強化”で良いんじゃないかとも思った。

「……成る程。空間震の正体は”デミフェアリー”だったのか。」

そこには、少女が一人佇んでいた。振り回すには少しデカイ大剣を持って。

「……！って危ないなあ……」

「まさか弾くとは思わなかったぞ。」

「……相手は殺る気か……はあ……こんなの柄じゃないんだけどなあ……」

「何をブックサ言っている?」

目の前の少女は顔をしかめるがこちらを確実に葬り去るために片手剣は振り下ろし初めている。

「Ailes Training……」

## 十香コネクション

「………Alleles Training」

Alleles Trainingその意味は万物錬成。かつてギリシャ神話のテクスチャ”黄金の時代”の錬成術を利用した。これは理論上あらゆる物を作ることが可能としている。

そもそも”黄金の時代”とは、クロノス様がお作りになされた人は疲れも労働も無い世界で幸せにいけると言うのがこの世界だ。

故に人は望む物を自由に手に入れることが出来るという概念を利用している。………ここから先は面倒な説明になるため省かせてもらう

今回錬成したのはオーソドックスの片手剣。だが、地球の奥深くより錬成しているからその固さは普通の固さではない。

じゅりりりつつ………キッソ!!

「………驚いた。そんな小さな剣で私の”塵殺公”が弾かれるとは思わなかったぞ。」

………サンダルフォン。

ユダヤ教の大天使の一柱。メタトロンの双子の兄弟だが、たまにメタトロンの代わって七大天使の一人として数えられたり、メタトロンの異名の一つとして扱われることがある。

ミカエルと共に堕天使長であり悪魔のサタンと戦う役割もある。

………ならば原点のサンダルフォンも相当の戦闘力が有ると考えていいだろう。

………大方この位だろうか。

「………厄介だな。単純な破壊力とは。」

剣に、魔力を貯め初め、徐々に熱と光を帯初めている。

それに対抗するかのように少女も大剣に力をいれ始める……

「ちよつと!!待って………これどう言うこと?」

横から飛び出したのは見知った顔だった。

「………あ。忘れてた。」

「ちよつと?!」

手をわたわたしているのは見ていて微笑ましいが、少しうざったい。

「無視をするなあああああ!!」

我慢が切れたのか、上から叩き潰す様に、剣が迫る。

「……………Blast。」

剣に込めた魔力と、剣そのものの魔力を光エネルギーに変換して速攻のスタングレネードにした。

「……………きゆう……………」

「……………ん?……………あつ……………」

基本、一人で戦う事が多かったから、周りのしかも味方の被害は考えて無かった。

スタングレネード程度の光なら自分にダメージが来ないようにするのは容易い。

が。それはあくまでも自分だけだ。

士道には少し……………いや大分刺激が強かったらしい。

倒れる前に、回収して背中に乗つけた所で、意識が飛び……………

「白黒のセカイ」

……………ここは……………虚数空間か。

自分の状態は思念体? ああ。体と離されているのか……………

……………ささないで。

何? 念話? いやこの世界その物の意志?

……………アイサナイデ……………

————はなれないで————

……………まさか

かえってきて————かえって————

もういちど、わたしのもとに————

もういちど————もういちど————

いえ————いいえ————

もうにどと————もうにどと————

わたしを あいさないで

……ティア……マト様。

数千……数万年ぶりですね。

人は、……我らは愚かしくとも日々進歩して歩んでいます。かつて神に乞い願いいきる時代は終わったのです。

時の流れは速くとも遅いものです。

……ドプツ!!

……これは黒泥……始まりの海水ですか……良いでしょう。ティアマト様。永遠にお慕いしております。長き時の話がティアマト様の慰み程度になれば宜しいのですが

「……ふん。させぬわ」

……!!……

「……随分と存在が磨耗したな■■■よ。」

……ギルガメツシュ……王何故ここに……?

「ふん。多少霊器を弄って単行動擬きを……それは良いわ。数万の時を得ても貴様は死ぬことすら許されないのだな……」

……憐れみですか。ならあのまま沈めてほっておいて欲しかったのですが……

「戯け。……」立って戦え。」そう言われたのではないか?」

……!!何故王がその言葉を……

「……何億。何兆もの雑種を切り捨てた?……人理を守るために。」  
……さあ。覚えていないですよ。ハッキリと分かっているのは自分がこの世界の中で一番人を殺したと言うことだけです。

「……そこが戯けなのだ。貴様は。」

……え?

「まあ確かに貴様は殺した。世界を生かすために殺し尽くした。だがそれで救われた人がいるだろうか?」

「……ああ。やっぱりか。この世界は間違えたのだな。神に依存し続けた俺らは……」

「……なあ。お前は这个世界が跡形もなく消えたらどうするんだ?」

「……成る程。死ねないから何処かまた違う世界で生きるのか



ジャラジャラガツキン!!

A a a a a a a a a a !!!

……………目が覚めた。

とても長い、けれども私が尊んだ夢を。

「……………目が覚めたかね?」

額に手の甲を当て、いつもの如く考え事に浸ろうかと言った時、隣から声をかけられた。

黒紫の髪の毛、女性が近くの椅子に座っていた。

「……………あなたは…………?」

「ここで解析官をやっている村雨令音だ。ここについては……………そっちの子が起きてからでいいかい?」

「村雨…令音。」

「……………そうだが……………何かな?」

「いや何でもありません。」

もう一度ベッドに倒れ込み、考え始める……………

(……………解析官ね。……………と言うことはここはあのデミフェアリーに対して何かを行う組織である事は確かだろう。)

(そして今さっきの女性。昔何処かであった事が有る?……………自分の魔力の残留が薄くあった。しかしそれなら気まぐれ程度に売った礼装に付いている量でもあるが……………)

「……………あう?」

小さなうめき声が聞こえた為、横を見ると、少し体を起こした士道の姿があつた。

「起きたか?……………」

「……………は?」

「……………ここは、ヘタラトスクの艦内だ。……………私はここで解析官をやっている村雨令音だ。……………君には先に言つてあるがね。」

「……………五河士道……………です。」

「……………時雨恭夜だ。」

「それでは士道。恭夜。我らの指令官がお待ちだ。ついてきて貰おう。」



そう言われて、部屋を出ると、白い道をまっすぐ歩いていった。

(……………虚数空間に入っているのか?……………いや違う相互間の時間軸の間に置いてある物か……………)

(とてもデカイな……………今は魔術は廃れてリアライズだったか?機械を利用して魔術に近い現象を起こしているとは聞いているが……………)

(だが、気になることと言えば魔術が廃れるのが少し早いと言うこと。ムーンセル・オートルマンでは少なくとも後400年程度は神秘が持つとはあったが……………)

(まあ今はいい。時間はまだある。さてここからは鬼が出るか蛇が出るか……………)

「……………ようこそ。へタラトスクへ。私が指令官の五河琴理よ。」

そうやって入ってきたのは、よく見覚えのある赤髪の少女だった。

「……………おい。お前の妹だぞ。何か言つてやれよ。」

「それなら恭夜の方が良いんじゃない?……………ほら琴理の勉強を見ているのって恭夜だし。」

「見ていたのは勉強な。ここまで行くと流石に自分も無理だわ。」

「……………じゃあ私も無理よ?」

「……………聞こえているわよ!!」

そうやって、これお前の妹だぞ。いやー無理っすわ。と会話していたら、琴理からハリセンで叩かれた。……………いつの間に装備していたのか……………

————閑話休題————

「……………とりあえず言いたいことはわかったかしら?」

「うん……………けどこれって……………」

「とりあえず、情報を整理しよう。」

・空間震を起こしているのは、”精霊”と言う少女達。

・基本精霊は”隣界”と言う場所において、顕現する際”空間震”と呼ばれる空間の歪みをおこし、世界に甚大なる被害をもたらす為、人類に災いをもたらす存在として本人の意思に関わらず討伐対象となっている。

・そして精霊は”霊装”と呼ばれる霊力で編まれた鎧を纏い、”天

使」と呼ばれる超常の異能力を秘めた最強の武器を持ち合わせている。

・これをへタラトスクは何故か五河士道と時雨恭夜に宿っている心を開いた精霊にキスをする事で、その力を封印し無力化する能力を持つて、精霊とデートして、デレさせその力を封印すると言う計画が行われ始めている。

・だが、五河士道は女であるため、基本口説く役目は時雨恭夜が行い、メンタルカウンセリングを五河士道が行う。

「……………と言う事だな。」

「これは……………なんとも言いがたいような…」

二人して頭を悩ませていたが、琴理は面白そうに

「まあとりあえず理解したら良いのよ。明日の都立来禅高校——

三〇〇にて訓練を行うわ。拒否権はない！」

「はいはい……………」

「それって私も？」

「お姉ちゃんもよ。」

そう言われ、一段落ついた頃。

「一段落ついたわね。恭夜貴方に聞きたいことが有るわ。」

「何かな？琴理ちゃん？」

「令音……………あれを。」

「はい。」

そう言って写し出されたのは、自分が剣を錬成する一部始終と、大剣を受け流すシーンだった。

## 恭夜エキス・パネーション

そう言って写し出されたのは、自分が剣を錬成する一部始終と、大剣を受け流すシーンだった。

(……失敗した。まさか盗撮されていたなんて……)

(魔術を使う人間がここのところ居なかったから油断した……)  
(今ここでこの船を落とすか? いや掌握に数秒。完全に落ちるのは数十秒。なら情報を他に送る方法がある。)

(なら暗示を使ってある程度辻褃が合う説明をした方が良さそう。)

ここまで凡そ2.5秒。無駄に洗礼されたマルチタスクである。

「……まさか見られていたなんてな。」

「悪く思わないで欲しいわ。……それと。貴方の持っていた剣を少し解析したのだけれど……本来金属が持つて良い強度では無かったわ。」

(そりやそうだ。地球と言う母体の奥深くから直接剣に変えた代物だからな)

「となるとそれは剣の範疇に入れていいものでは無いわ。…ねえ恭にい……いえ。時雨恭夜。貴方は何者?」

剣呑な瞳の光と共に信じてみたいと揺れる妹分の顔を見て、仕方ないかと思いい始めた。

「……なら一つ約束しろ。」

「ええ。良いわ。」

「……まともに受けとるな。こう言う世界があると言う事だけ分かるわ。」

そう言うのと、この話を聞いていた人々はこちらに視線を集めた。

「……なら語らせて貰おう。まずは“魔法”と言われたら何を想像するかな?……土道?」

「え?……あ……炎を出したりとか?」

「まあそんな認識で良いだろう。じゃあどうしたら手から炎を出すか?それを科学的には言わないが人に使える領域に落とす物。それが“魔法”だ。」

「……じゃあ貴方のそれも魔術？」

「魔術の中の一つではあるな。」

「話を戻そう。今回使ったものが魔術に近い物、錬金術だ。」

「錬金術ってあの手ではーん!! って？」

「あれはもう権能の領域で……権能は神が使う技とかだな。何せ人に扱える代物ではないものを権能と言う。」

「じゃあ。エリクサーとかか? ゲームの?」

「……ああ。そっちを言えば良かったか。そうエリクサー通称”反魂薬”と言われるほど万能で文字通り死者蘇生まで出来ると言われた代物だ。」

「……じゃあ。それを使えば……」

「ところがどっこい。これは”完璧な死者蘇生しか使えないんだな”

「……完璧な死者蘇生?」

「そう。そもそも死者蘇生を行うには2つの条件がある。まず一つとして”死んだ人間の肉体がそのままそっくり残っていること”そして”死んでから凡そ310秒以内”が限界だろう。……もし、肉体から魂までと言った完璧な死者蘇生は今まで成功した試しが無い。実際行つた愚か者は居たが……まあ悲惨な結果にしかならなかった。」

肩を竦めて茶化したのが本当に録な事にならなかった。

錬成された肉体は良い器だ。少なくとも、死んで霊体なつた者には。そして錬成して魂を周りの魂と共に押し込めるものだから、器が足りず、周囲の肉体を無差別に貪り始めた……これが結果だ。

もうグロイとか言う次元では無かった。

肉体は膨れ上がり、魂は歪みきりかのラフムか……外宇宙の使者を思い出した。

啓蒙が上がりそうなのでここまでにしておこう。

「とまあそんな感じだ。」

そう言うと、納得したような出来ないような顔をしながらももう夜との事でもここでお開きとなった。

「時雨家」

「………ただいま」

「お帰りー!!」

家に帰ると、朝と同じ様に、妹と八舞姉妹がいた。

「疑問。何で遅くなった?」

「ああ。まあちよつとな。」

そうやって雑談しながら1日が過ぎて次の日。

「学校・廊下」

次の日、学校に行くと、同じクラスの鳶一に捕まった。

「……………ねえ。昨日、外いたみたいだけど大丈夫だった?」

「ああ。お陰様で。特に何も無かったよ?」

「そう。……………貴方は、あの人型を見た?」

「?ああ。見たけどあれは一体?」

「あれは”精霊” 私達の敵。」

「ふーん?」

知らないふりをしながら鳶一から情報を搾り取ろうとする。

「戦って大丈夫だったのか?見たところとても大きな剣を持っていたけど。」

「ん。それぐらいなら良い。」

「……………お前は何で戦うんだ?」

「勿論……………」

鳶一は語った。

炎の精霊が自分の両親を殺したと、もうそんな悲劇を繰り返さない様にするために戦っているのだと。

そう言つて、鳶一は去つていった。

「……………成る程。」

(デミフェアリー……………精霊は幻想種のように簡単に殺せるか……………それにしても、あの時の顔は……………)

『無視をするなああああああ!!』

(そう妖精の幻想種にしては人間味があつた。本来の精霊や妖精ならお遊び感覚で人を殺すし、気に入った相手なら自分と同じ様に精霊にするか、○○○○として子を孕み、子を成そうとするが……………)

(あれではまるで幼少の人間の様な……………いや?まさか?)

(それはとりあえず置いておこう。それより、”何故か五河土道と時雨恭夜に宿っている心を開いた精霊にキスをする事で、その力を封印し無力化する能力”これが一番の謎だ。)

(キス……つまりは口腔接触によって魔力パスを繋いで、その精霊結晶の力を自分の中に納めるのだろう。)

(一種の瞬間契約の類いだろう。)

(だが心を開くとは……？契約なら血液や唾液でも出来るが……)

(わからん。まだ謎が多すぎる。精霊と言い、かのユーラシア大空災の時に抑止の介入がないことも。)

ユーラシア大空災。

30年程前に起きた最初の空間震として認識されているが、その程度で収まる物では無かった。

龍脈は綺麗に穿たれ、そこは神秘の溜まり場となり、いずれ幻想：亡霊が溢れかえっただろう。

某インド神話では珍しくない地形の凹み、マナ、オドの歪みで一瞬神代の回帰が起きたのかとガチで考えてしまったぐらいヤバかった。

神代ならまだしも現代ならあれは確実に抑止力が動くはずだが、動いた形跡はなかった。

(情報がほぼ無い状態で考察しても無理があるか……)

「……はあ……」

「キヤアアアアア!!」

下の方で悲鳴が聞こえる。

「………はあ……」(2回目)

大体察してしまった。昨日嫌と言うほど頭を悩ませた自分の魔力の感じが

「どうしたの?」

「あ!時雨君!そこで倒れている人がいて……」

そこを見るとやはり予想通りの人間が倒れていた。

「……大丈夫ですか?解析官殿?」

「ああ。時雨君か。寝不足で少しな。」

「………どんだけ寝てないんですか……」

「まあとりあえず、資料室にきてくれ。五河と一緒に。」  
「了解しましたよつと。新しい先生?」

「学校・資料室」

土道を引つ張りながら資料室のドアを開けると、琴里と村雨がパソコンの前に立っていた。

俺たちが来たことをしり、手招きして呼ぶ物だから、パソコンの画面を見ると無駄にポップなBGMにカラフルな髪的美少女たちが順番に画面に表示されたゲーム?があった。

「……」恋してマイ・リトル・キョウヤ?」

「ギャルゲーってやつじゃない?」

「姉さん鋭いわね。そう、精霊を惚れさすためにギャルゲーで力を付けようって言う魂胆よ。」

「成る程……?それで土道は何をするんだ?」

「土道には……百合ゲーをしてもらうわ。」

「百合って……あのリリーか?」

「そう言う意味じゃないのだけれど……まあ良いわ。姉さんやってみてちょうだい。」

「え?……ええ?」

まあとりあえずと言うことでゲームを始めた。

『おはよう、お兄ちゃん! 今日もいい天気だね!』

一瞬の暗転とともに画面に表示されたのはベッドで寝ている主人公をパンツ丸見えのまま踏みまくっている妹キャラの姿だった。

「……………なにこれ?……妹?」

「そうだね……あ! 選択も見てみようよ!」

そう言われたので▽をクリックすると画面には三つの選択肢が表示されていてどれもこれもが酷い選択肢だった。

① 「おはよう。愛しているよりリコ」

愛をこめて妹を抱きしめる。

② 「起きたよ。ていうか思わずおつきしちやったよ」  
妹をベッドに引きずり込む。

③ 「かかったな、アホが!」

踏んでいる妹の足を取り、アキレス腱固めをかける。

「録な物がねえ……」

「あはは……」

まず一番はセーフよりのアウト。だと思おう。二番はどう考えてもアウト。このまま近〇〇〇〇なんぞ神代ギリシヤ位だぞ。三番は………蛮族対応？

まあもう一度よく考えよう。

画面には好感度ゲージがプラスとマイナスに。そして時間制限の時間が書かれている。

「……ああ。成る程……」

そう言つて、コントローラから手を放した。

といった感じで一回でゲームをクリアして白けさせてしまったのはまた別の話………

「数日後」

ウウウウウウウ

「……やれやれ。次はここかい……」

『本当に要らないの？』

「任せとけて………上手くいくだろうからさ。」

彼は一人無人の教室に佇んでいた。



## 十香アンド恭夜リンク

「……やれやれ。次はここかい……」

『本当に要らないの?』

「任せとけて……上手くいくだろうからさ。」

「数時間前」

「……よし。これで全エンド回収だな。」

画面には結婚式をあげている画像と共に下から製作者の名前と音楽が流れていた。

「……よくやるわ。」

「……え?どういう事?」

「ああ。姉さん。これね……ヒロインに殺されるルートも有るのよ。それでも恭夜ったら表情一つも変えずに全30ルート全て回収したのよ。」

仕方がないじゃないか。ハーレムもヤンデレの無理心中も見飽きたのだから。

特にヤンデレのハーレムは見ていてヤバかった。

何回、忘却魔術を掛けたか

まあ押し付けた自分に非が有るといえば有るが……

「……世界最速か?」

「多分ね?……それでもほぼ間違えずに回答できるなんて……うちの開発室は今泣いているわよ。」

閑話休題

「……落ち着いたかしら?じゃあ次の訓練を言い渡すわね?」

「……次ねえ……大方リアルでつて事かい?」

「鋭いわね。そうよ。だれでも良いから声をかけて一定以上の好感度を出せば良いわ。」

……と言われ……

最初に教師を粉にかけた。

こう言うナンパ術は十分と教えてもらった。

…某トライスターはナンパするのは良いが、後片付けをしないから

大体私がしていた。下手すると私が死ぬからね。

まあ何せこう言う理由でナンパはなれている。例えば惚れされる程では無いがある程度の好意を抱くとか……まあ暗示を利用するのが一番なのでは無いかと思われがちだが、下手をすれば性格が変わったりするためだから、基本色恋沙汰には暗示を使うことは最小限にしている。

最小のターゲットは担任である岡峰珠恵を口説けば良いらしい。ある程度、今日の話題にあった雑談をしながら話を深く掘り下げる。恋愛の話になったら少しちやかしながら会話を紡ぐ。

「……まあでもそんなに真っ直ぐなら直ぐに良い人が出来ますよ」

はい。終わり。人間は多少の思考誘導と、+の事を言っているところつと信用してしまう。

「……これで良かったか？」

『ええ。まるで詐欺師の様な。聞いていたこつちまで騙されそうだったわよ。』

「それは上々上々。」

無線を聞きながら歩いていたら、本来気が付く筈の死角から接近してきた女子とぶつかってしまった。

「……………ゴツン……………っ！て鳶一か。大丈夫だったか？」

相手に当たってしまった、自分は衝撃を足に受け流して、立っっているが、鳶一は転けてしまいその白が見えてしまっていた。

(時代が時代なら履いていないって事も有り得たな。)

「平気。どうしたの？」

どうやら数秒後には体幹がぶれる事もなく立ち上がる辺り、やはり特殊部隊の事柄と言うべきだろうか。

「昨日の会話」

「……それと私達以外にも精霊を狙っている組織が有るわ。」

だろうな。土道は、似たようにデレさす組織だと思っていそうだが、十中八九処理だろうな。

「その名前はAST。”精霊専門の処理組織”ね。」

「処理って……………一体？」

「簡単よ。ぶっ殺すの。」

「……こっ殺す?」

「ええ。簡単に言えばあんなの死んでくれた方が良いでしょうね。」  
「……実際。世の中から否定され殺し殺されたのだからそれには納得できた。」

「……ねえ……恭夜貴方はどう思うかしら?」

「ああ。だろうなとは思ったよ。セイレムしかり、聖女焼きしかり実際有り余る力は排除されやすい。」

『ちようど良いわ。恭夜彼女に声を掛けなさい。同年代でも話をした方が良いわ。』

『ええ。今ここで去ることは許さないわよ。精霊とは言わずとも貴重なASTだし。』

「……いや。前方不注意だったただけだ。悪かったな。鳶一。」

「……折紙。」

「…………?」

「一応こうして居る時は折紙で構わない。」

「そうか。なら折紙。踏み入った事を聞いて良いか?」

「……内容による。」

「お前の両親を殺した精霊を殺した後お前は何を目標に生きていくんだ?」

「………!……それは……」

「別にお前の復讐を止めさせたい訳じゃない。その復讐心が悪いとは言えない。所詮同じ穴の貉だからな。……だがそれ以降の目的を持って、そうじゃないとお前は……」

ウウウウウウウ

「……!!お話はここまでだな。じゃあな。頑張れよ折紙。」

そう言つて、相手の反応も見ずに、死角に立つ。

「どこに来るんだ?琴理。」

『残念だけど……ここよ。それも貴方の教室に。』

「成る程……ああ。それとここからはインカムの受信を切っておく。送信はするが。」

『ちよっ!!ホントに大丈夫なの?』

「よく考えろ。精霊とは人智の越えた存在だ。下手に後ろに何か居るとなると悪感情を抱かせやすい。」

『……成る程ね。なら良いわ。許可します。』

「おう。」

教室に戻る。そうしたら見知った気配が教室からする事にその識別能力の高さとこれからの面倒事を思い、少し息を吐く。

「……やれやれ。次はここかい……」

『本当に要らないの?』

「任せとけて……上手くいくだろうからさ。」

ガラツ

できる限り大きくドアを開ける。

相手に分かりやすい様に。

忍び込んできた場合信用はされにくいのはベタだ。

「おうおう。派手に壊してくれちゃって。一応俺の教室何だぜ?ここは。」

「止まれ。」

チャラけた様に入って行くと、この前居た精霊が足を狙って剣を振りかざす。首に狙いを付けない辺り率先して殺したくは無いらしい。

「……お前は……」

「あ。覚えてくれていたのかい?なら良いや。ちよいとお話しようか。……まあ待て今日は剣も持ってきてないし、銃何て持ったの他だ。……信用とは言わないが、少し話を聞く……って事は良いんじゃないかい?」

「……話を?」

「そうだ。正直、あの時剣で受け流したが、実際は壊すつもりだったんだが……中々堅くてなあれほどの大きさだと重量もヤバイ筈だから。少しお話したかったのさ。」

「……人間。お前は信用して良い人間なのか?」

「……それを決めるのは、お前だ。」

「……なら!私を否定しないか?」

精霊のその瞳はよく見知った顔だった。

「ああ。それだけはしないさ。」

「絶対にか?」

「絶対だ。」

「絶対に、絶対に、絶対か?」

「おう。」

「絶対に、絶対に、絶対に、絶対に、絶対か?」

「ああ。約束しよう。」

「……ふん。なら信用しても良いかな。勘違いするなよ?情報が欲しいだけだからな。」

「おう。」

それでも信用するに値しそうな人間が現れた事を嬉しく思ったのだろう。その顔は嬉しさに溢れていた。

ガガガガガガガガツ!!

騒がしい音と共に、壁に銃痕が付き、壁は壊れていく。

「……またあのメカメカ団だ。」

「メカメカ団?……ああ。ASTの事か。」

それでも鳴り止む事なきその耳を裂くかのような音に正直気分が悪かった。

「無粋な。」

「……え?」

「魔術使い擬きが……格の違いを知れ。」

現代では私しか使い手が居ないであろう原初のルーンを利用して、  
”幻覚”“隠蔽”を刻んだ。

「……これで静かになったな。」

「……これは一体……?」

「まあ不思議な魔法って奴だな。」

閑話休題

「じゃあとりあえず、お前の名前を教えてくださいませんか?」

「……名前は……無い。」

「……無い?……ああ。成る程。そう言う事か。」

「……待ってくれ。」

「何だ？」

「人と話すとき、名前が無ければ呼びようが無いだろう？」

「まあそうだな。」

「……なら私に名前を付けてくれ。どうせ私はお前としか話せないのだから。」

「……一理有るが……本当に良いのか？」

「ああ。よろしく頼む。」

「ならお前の名前は……十香。今日が10日と言った何の捻りもない名前だが……とりあえずはこう言わせて貰おう。」

「……十香。……十香か。どういう字を書くんだ？」

「……こうだな。」

黒板に残っていたチョークで十香と書く。すると上から十香がなぞった。

「……なら始めましてから進めよう。私の名前は“時雨恭夜”だ。宜しくな。十香。」

「うむ。きよーや。宜しく頼むぞ!!」

その笑顔は……どこかで……?!

『……ど■せ私は貴■か知■な■。■み■はおらず■止めてくれたあ■に……■まりを……■下さい……』

『■当にそれ■い■?』

『■い。』

『……なら■だろう。魔■師■の名に■汝の名■す。……汝は■。単■が貴方に魔■護が有■こ■』

『……クツ……!!』

「どうしたのだ?!きよーや?!」

「ああ大丈夫だ。少し眩んだだけだ。」

(あれは一体……何を?)

少々アクシデントがあったが少し時間を置いてまた質問する。

「……ならお前がAST……メカメカ団にはどうして狙われ始めたか覚えてるか？」

「……………うむ。突然そこに、意識が芽生えて目を開けたらもう空からメカメカ団が、空から私を狙っていたのだ。」

「……………成る程…自然発……………!!」

バリツ……………バツキーーン!!!

けたたましい音共に、結界は割れて、直ぐに銃声共に、硝煙の匂いがし始めた。

「……………とりあえず今回はここまでだな。次回会った時には何か美味しい物を持ってきてやるよ。」

「こう言う時は無粋なで良いんだよな? きよーや。楽しい時間を壊して……………!メカメカ団めえ……………!」

「……………」身体強化”及び、”フィルムミアド”起動。対象はデミ・フェアリーの十香。」

「……………」塵殺公”ああああああああああ!!」

「じゃあな。また今度。……………琴理。回収を……………」

『ええ!……………中々の腕前ね。』

「何処かの場所」

「どうやら同族に接触したらしいぞ。私達のマスターは。」

「確認。嫉妬しますか?」

「……………別にそんな事……………」

「私はします。……………速く襲って直接魔力供給をしてくれたら良いのに……………」

「……………そつ……………そこまではまだ恥ずかしくて……………」

「誰かのヒトリゴト」

「……………ようやく。計画はフェーズIに入った。」

「ここから彼に、全精霊を……………」

”五河土道。”……………貴方は何処でも邪魔をするのね……………」

「まあ貴方らしいと言えば良いのかしら……………?」

「……………それでも私は貴方をもう離さない。一回目はその手を離されてしまったけど……………」

「……………今度こそ、繋ぎ止める。」

## 恭夜ファンタジア

……これは確実に夢だろう。

はるか昔。まだ世界に幻想種が蔓延っていた時代。されど私が産まれた時代よりも弱くなっている。

もはや英雄は。我らを導きそうありたいと羨望する英雄は居なくなつた。

頃合いなのだろう。真エーデルで魔力を摂取していた幻想種はいずれ神祕の廃れと共にエーデルもいずれ消え去るだろう。

これまでに幾度となくこの狂った輪廻を壊そうとした。

それでも上手くいく結果は見付からなかった。

だから私は……自分が一番忌み嫌つた物”根源”に手を掛けた。

いや掛けたはずだった。

それでも……この全宇宙の中からたつた0.00001gの物質を見つける程の確率に私は触つてしまった。

「……触媒及び、陣は完璧。」

「ならば、抑止力に見つからない様に、歴史の転換期に合わせて発動すればいい。」

「……アクセス・■■■■」

「人は老いた者より地に還るそれは真。」

「この世で栄える者有れば廃れていくそれは理。」

魔方陣が、龍脈で引いた立体型魔方陣が仄かに少しずつ発光し、回転していく。

「されど我は。その理、真より外れし存在。」

小さくスパークが起き始め全ての魔方陣に光が宿る。

「始まりを知るものとして、終りをここに臨む。」

抑止が、抑止力が私が行おうとしている蛮行に気付いたらしい。

「誓いをここにっ!!我は常世全ての善悪混沌一切合切飲みほす者!」

国が滅びる。城が墜ちる。紅き龍が最後の声を上げながら滅んでいく。





「……………ですが世界。貴方は一手遅かった。」  
鍵はもう扉に刺さっている。

「世界。」

扉が周囲の魔力を貪りながら開いていく。

「……………私の勝ちだ。」

私は吸い込まれる波に逆らうこと無く吸い込まれる。

その時。

■■■■より見ていた神は面白ろ半分には、根源より慎ましい何かに私を繋いだ。

「……………？」

情報が頭を上書きする。

” 平行世界”” 異世界”” 異聞帯”” 特異点”

「……………あつ……………くつ……………」

量子化した情報の波が自分の思考を魂を汚染し始める。

” 原初の魔術”” 神言”” 真体”” 統一言語”” 神の怒り”” 獣”” 冠位”” 根源接続者”” マハトマ”” 黙示録の獣”” 人類愛・悪性絶滅自戒機構”” 怒りの日”

” 善悪二元論”” 終焉呼びし世界龍”” 神々の黄昏”” a k u s a r””

第三種永久機関”” ナノマテリアル”” 退廃の風”” 星霊”” 主権”” アウトロー”” 魔法”” 降臨者”” 外宇宙”

「……………あ……………何だ？これは……………」

” 座”” 渴望”” 第一天・二元論”” 自滅因子”” 第二天・墮天奈落”” 残滓技”” 第三天・天道悲想天”

「……………まで。まで。」

もう声を出すのが億劫に成る程情報が私を食い散らかす。

「こんな事は知りたくない!!私の願いは……………ただ死ぬだけで……………」

その掠れ声にもならない悲鳴は暗闇に吸い込まれて今まで以上に情報と魂の書き換えが激しくなった。

” 第四天・永劫回帰”” 占星術”” 素粒子間時間跳躍・因果律崩壊”” グランドクロス”” 生と死の刹那に未知の結末を見る”

「……………違う。違う違う!!こんなもの要らない!!」

これ以上に知識が、知識の中に宿る感情が私を食い破りヒトを凌駕しようとする。

” 修羅道至高天” 軍勢変生” 混沌より溢れよ怒りの日” 無間大紅蓮地獄” 無間刹那大紅蓮地獄” 第五天・輪廻転生” すべての想いに巡り来る祝福を” 第六天・大欲界天狗道” 唯我曼荼羅” 卍曼荼羅・無量大数”

「私は全てを愛していないし！抱き締めたいとかなない！！森羅万象滅尽滅相なんてもつての他だ！！」

” 上位世界” 神座”

「……………あ……………」

「時雨家・寝室」

「……………！！……………夢か……………」

ベットから跳ね起きて、備え付けの時計を見る。時刻はまだ3時。外もまだ薄暗い。

目の辺りに肘が当たるように置いてまたベットに倒れこむ。

……………知らぬ内に冷や汗をかいていたようだ。まだはげしく動く心臓の鼓動を感じながら、また瞳を閉じて呼吸を整える。

「……………はあああ……………」

(今日は……………学校……………は無いか。さすがに壊れすぎているだろうし)

(誘ったのは良いが、来るか？いやまあ来なければ、霊脈の整理しないと…また乱れ始めてる)

(まいったな。幻想種擬きが顕現するだけで現代の霊脈が歪むなんて……………)

(……………もう。根源に至る事は出来ない。あまりにも神秘が枯渇しすぎている。)

(たかだか精霊擬き一匹顕現しただけで歪む程では十分な魔力も集められない)

(かと言って、擬似聖杯を作り神秘を底上げしても現代の人間が耐えられる訳がない……………)

(となると、流出しか……)

(いや。駄目だ。流出なんてしてみる。私の渴望は“死にたい”だが魂は死ねない。)

(座の世界は私の渴望通りに動き始める。相反する2つの渴望と魂が世界を侵食したら確実に天狗道レベルの悲惨な世界が出来上がる。)

(かと言って諦める事はしたくない。)

(最悪、無間刹那大紅蓮地獄の様……)

「起床。起きてください……」

……どうやら長々と考えていたら八舞の夕弦の方が今日は起こしにきたみたいだ。

「……ああ。今日は夕弦か。おはよう。」

「確認。起きていましたか？」

「……まあそうだな。微睡んでいたよ。」

「……抱擁。マスターはまた悪い夢をみたのでしょうか。人は、人肌を好みます。わたしだって例外では有りません。……貴方が何をしているか。おおよそ予想がつきます。だけれど……」

どうやら予想以上に様子が可笑しかった様だ。夕弦に心配されあまつさえ、抱き付かれ耳元で囁かれている。

「……マスターには私達が居ます。せめて私達にも吐き出してくださいね?」

……後ろに押し倒し、抱きつき、まるでマーキングするかの様に胸に体を押し付けて軽く擦り付ける。

バツ!!!

「こらあ!!夕弦!それ以上良い空気にはさせないぞ!!」

「不満。そこで引っ込んでいてください。耶俱矢。私達は今から足りない魔力分を魔力供給で……」

「お前十分たりてるだろお!!」

「嘲笑。嫉妬ですか？」

「……ちやっ!ちやうわ!!」

「おい。その八舞姉妹。コントは終わったか？」

「コントじゃない!!」

「時雨家・リビング」

「……………」

まあ随分とキャットファイトをしたようだ。

姉妹どちらとも似たような小さな腫れが出来ている。

「……はあ……」

「質問。今日は何処かに行くのですか？」

妹は近くの大きな公園で部活。どうやら試合が近付いているようだ。

「…そうだな。まあ暇だし町を歩いてくる。それと霊脈の整備と。」

「じゃあ。夕弦どうする？」

「質問。霊脈の整備は私達がしても良いものですか？」

「ああ。それは大丈夫。特に時間とかは考えてないな。ああいう物は時間が経つにつれ元に少しずつ戻っていくからな」

「分かった……じゃあ頼んだよ？マスター。私達を救ったように。その子も助けてあげて？」

「分かった。八舞姉妹も何かあれば念話でな。」

「町」

「まあだろうな。」

とりあえず学校に行くと、しばらくの間は臨時休校にするらしい。

まあそうだろう。ASTが派手に壊した挙げ句、十香がぶっ壊した。

現代の建築が発展していると言ってもここまで壊れたなら一晩では無理だろう。

「ここもか……」

数日前、始めて精霊と会った場所だ。

どうやらここもまだ直されていないらしい。

「しかたない。迂回して……」

「おい！きょーや！！」

ルートを頭の中で考えながら歩いてたせいか耳元で声がするまで気が付かなかった。

「うお!!……十香?」

「ふん……ここまで来ないと気が付かないとは……」

少し十香はへそを曲げているようだ。

「ごめんな。少し考え事をしていたんだ。」

「……むう。次は無いぞ……」

「ああ。肝に命じよう……会いに来てくれたってことは」

「美味しいもの!!」

「え?」

「食べさせてくれるって言ったぞ。」

「ああ。そうだな……それと十香……服は……それしかないよな。」

「まあそうだな。」

十香が着ている服は、会った時と同じ格好をしていて、今から町に繰り出そうと言うには少し異質だった。

「仕方ない……古きルーンよ。」

”幻影”隠蔽”質量”

3重に重ねたルーンを利用し、とりあえずは学校の女子制服に見せ掛けを変えた。

「おお……服が変わったぞ!これが魔法って奴か?」

「まあ似たような物では有るな。うん。意味を含む文字”ルーン”を利用した質量の有る幻覚って所だ。」

「ふーん……」

「何処かの喫茶店」

「……丁度良い機会だ。何故彼も精霊との交渉役選ばれたんだ?」

ここはとある喫茶店。五河姉妹は学校に行ったのだが、どちらも休校との事だったから、琴理はついでに令音を呼び出して、三人でお茶会……もとい女子会をしているのだ。

「……それ私も気になるなあ……」

「そうね。隠しては置けないわね。彼……」

「少なくとも2人精霊を家に匿っている様なの。」

「精霊を……?」

「ええ。姉さん。恭夜から何か聞いていないかしら?」

「恭夜から……?特には何も。ほら恭夜って良くも悪くも人に頼らな

い事が多いからさ。恭夜が私達の家に来ても恭夜の家に行った事なんて数えられる程でしょ？」

「ええ。そうね。」

「まあ恭夜も私達も境遇は似ているからね」

「どう言うことだ？」

「令音それはね……」

## 十香デート

「私達って本当は実の姉妹って訳じゃ無いんだ」

「……ほうそれは……従姉妹とかかい？」

「いいえ。一つ道を逸れれば全く知らない人になっていたでしょうね……」

「あはは令音さん。私達って実は養子関係なんです。」

「それは……つまり士道が……」

「はい。私が養子ですわ……」

「……そうよ。言ってはなんだけど、初めて会った時なんてもう殆ど目が死んでたからね……」

「あはは。色々有ったんだよ。」

「……その時に恭夜と会ったのかな？」

「ええ。その通りよ。」

「やっぱり親に捨てられたって言うのは心に来まして……」

「そこは姉さんの省いた方が良いわね……そう。実は私達の親と恭夜の親って何かと親しかったらしいのよ……」

「そこからかい？交流はそうね……」

「そうね実さ……ぶうううううううううう!!!?」

琴理は突然、目を見開き口に含んだオレンジジュースを目の前にいた令音に吹いてしまった。

「え!!?何々!!」

震える指を、その先に当てる。

そして士道と令音がそちらに向くと……

「……なまらびつくり」

「やはり二人は血が繋がってなくても、姉妹だな。うん。」

琴理、士道とどちらも同じタイミングで北海道の方言を呟ける時点で令音は姉妹だなあと思った。

そしてその視線の先では……

「……おいーきよーや!!この”きなこぱん”って奴も食べてみたいぞ



!!

「きなこパンか……よし！俺の分と二つだな……金は余り使わないから余っているが……引き落とさなきや不味いなこれ……」

「……あれは精霊だろうか？」

「わからない……けど十中八九そうでしょうね。……あそこまで整った容姿……まあ彼が似た子をナンパした確率は……無さそうね。」

「それはどうしてだ？」

「そもそも、恭にいをきよーやなんて言う人なんて居ないからね。となると……」

琴理は携帯電話を開き、ラタトスクの回線に繋いだ。

「……ええ。私よ。緊急事態発生。作戦コード051”天宮のデート”始動。急いで。」

「……成る程ここで仕留めるのかい？」

「ええ。……姉さんはどうする？」

「……私は……もう少しここでゆっくりしてから帰るね。」

「分かった。」

「精霊・恭夜side」

「もきゅもきゅ……うむ！このきなこパンとやらも美味しいな！恭夜！」

「そうだな。以外と久しぶりに食べたが……ふむ。なかなか……」

二人して、喫茶店のきなこパンと十香はココア。私はコーヒーを頼み、一時の静かな時間を過ごしていた。

「……それにしてもこのきなこパンとはなんとも美味しいものだな！……まだ食べたくなってきたぞ……あの強烈な習慣性……あれが無闇に世に放たれると大変なことになるぞ……人々は禁断症状に震え戦が起きるぞ……」

「あはは。流石に考えすぎだ。」

……そう何時だって人が溺れるのは1に不老不死2に金3に権力4に薬と相場は決まっている。

……どれだけ綺麗な国であろうと、水に薬を混ぜ、武器とカジノを与えてやればすぐに腐敗し墮落する。

それは例え、人類が宇宙に飛び出し、宇宙人と会ったとしても。また十香はきなこパンを頼み、私はコーヒーをもう一杯頼んだ。本当はハニカムやエール、スピリタス等の悪酔いが出来て尚且つ酒に溺れられるのが有れば良いが。

ちなみにエールは単純に酒。ハニカムは蜂蜜酒の様な物だ。度数が高く、”悪酔い用”として好まれていた。

……日本じゃあ手に入りにくいか。

コーヒーをグイツと臍腑に流し込んだら、伝票を見る。

……3000円弱。まあ安い方かと納得させ、もう飽き始めた十香を立たせて、会計をする。

「おあいそ。」

「はい。こちら、3827円になります。」

「それではこちらから。」

紙幣を4枚取り出し、トレーに乗せる。

「……こちらお釣とレシートになります。」

まず小銭を財布に仕舞い、レシートを受けとる。

”サポートする。自然にデートを続けたまえ。”

レシートのはしに書かれており小さく領き、口パクで言うておく。

『有難うございます。』

『ああ。気にしなくて良い。仕事だからな。』

どうやら見立て通り、読唇術を使えた様だ。

「こちら、商店街の福引き券になります。この店から出て右手道路沿いに福引き所がありますのでよろしければお使い下さい。」

……随分とよろしければを強調して言うのだから、絶対遣えとの事なのだろう。

「……これなんなのだ？きよーや……？」

「ああ。これはくじ引きと言つてね……まあ見る方が速いか。」

そう言つて十香の手をとり道を進んでいく。

「……ここか。」

福引き所に行くと、まあまた白々しい人間が大量だった。

と言うか、ここにいる並んでいる人も抽選器のスタッフも全員フラ

クシナスの中で見た気がする。

「……………ここかあ!!」

「こちらこちら。声が大きいぞ。」

「どうやら前に立つスタッフはよくみしった顔だった。」

「……………良い機会だし、十香。回してご覧?」

スタッフに持っていた福引き券を渡し、十香をガラガラの前に立たせる。

「これをこうか?」

ガラガラガラ

ポトツ

「……………赤玉か……………つまり……………」

「おめでとうございます!!一等です!!」

そこには赤玉を一等に書き換えているスタッフと鐘を鳴らしているスタッフがいいた。

「……………ここまでするか……………」

「ボソツ仕事ですから……………はい!それでは一等賞のドリームランド完全無料ペアチケット!!」

「……………遊園地か?聞いたことのない名前だけど……………」

興奮した様子で手にとる十香にスタッフは半分血走った目で乗り出し言った。

「裏に地図が書いておりますので!是非今からでも!!」

「……………はあ……………」

「そうやって後ろの地図を見ながら雑居ビルの間を通って行くと確かに城があった。」

…………… 倡館と言う名の。

「……………はあ……………城と言ってもらの城かよ……………おーい?十香?まだ年齢的に入れないみたいだ……………だから違う所に行こうか……………」

「そうなのか?……………それは残念だ……………」

「フラクシナス艦内」

「…………………………随分と奥手ね。」

「ふむ。それでも初手から”あそこ”はキツいだろう。」

「それもそうね。……それでは次の作戦。”高台”。」

「RST」

「……存在適合率98.73%となると偶然とは言えないでしょうね。」

「……発砲許可は？」

「……多分とれないわ。”暴走”させた”知らずに現界”していただと責任問題になるらしいからね。」

「……」

「まあ納得ならないのは分かるわ。それでも……！……驚いた発砲許可が出たらしいわ。」

「……折紙何があんでも精霊を一撃で仕留めなさい。失敗は許されないわ。」

「……了解。」

恭夜と十香は導かれるように、夕陽に染まった高台にいた。

「……絶景だな!!」

「……そうだな。」

奇しくも私はこんな高台は好きだった。……何もせず只ひたすら過去を想いながら沈んでいく陽を見るのが好きだった。

落陽と言うものは不死者には一種の猛毒になる。

過去を写すが故に。

「……きよーや。これはデエトと言うものなのだろうか？」

「一般的にはそうだろうな。」

「……見る。私が言えた事では無いがこの世界はとても美しい。

……最もそれを私がこわしているのだが……」

……その横顔は何処までも美しかった。

「……なあ恭夜……う？」

その時。私は自分の索敵範囲の中で一本の光を見た。

「………十香!!」

ダッ!!

それは銃だった。多少魔力で強化していると言ってもここまでダ



## 恭夜エンジェル

……はるか昔。

私は人生に飽きてきて、名前も変えず数百……千年使っていた頃があつた。

目的としては、自分の名前を統合する事によって存在を強くして神格を得て、少なくとも九十九神に。多くても下位の神格を得て、人類の発展と共に、消え去るために名前を変えずにいたのだ。

……そしたらそれ以上の面倒事が襲ってきた。

まず。魔術師の関与。

そもそも魔術師は、相互非接触を原則とし、嫁入り及び婿入りの際以外はあまり他者……引いては関わりの無い魔術師との関わりはタブーとされてきた。

それでも尚、関わってきた理由としては”魂の劣化無くの転生現象”だった。

実際、魔術師の世界では転生や、不老不死になるための術式は有るが、それあまりに多すぎる記憶に耐えきれず記憶を喪い、いずれ無限の生を望み続ける怪物と化す。

実際。不老不死を求めて外法に堕ちて尚も不老不死を求めた哀れな怪物がいた。

それ以前に不老不死は全人類の夢だ。だから、姿が変わっていても、知識、記憶その二つを変わず所持し、転生する私を度々襲ってきたのだ。

面倒事その二。

幻想種の関与。

こっちはもはや死活問題と化していた。

元々、精霊や、それに対なる物どちらも神秘を好む。

神秘は段々と減り、唯一残っていたのが、かのブリテンと最後まで粗人神が残っていた日本だけだった。それでも、精霊が妖精が全力を出すには足らなかった。

その為に……私は、八雲の賢者に掛け合い、龍神、3つの世界の女神

と掛け合い、最後の幻想が残る里

”幻想郷”を作り上げ…………

話を戻そう。

ともかく、幻想種にとって滅っていく神秘は死活問題だった。

唯一神秘をためる方法として、神秘が貯まっている物を吸収するだが…………

ここで考えてほしい。

私は、はるか昔、まだ神々が覇権争いをしていた頃の人間だ。

そして…………海水の地母神の加護も受けている…………

さて…………

そんな神秘の塊の様な者を幻想種はほっておくだろうか？

否。断じて否だ。

となるとどうなるか？

簡単に言うと、いつでも構わず襲ってくる。

姪魔なら姪魔らしく。精霊なら、自らの契約者に。

妖精なら…………上の二つと似たような目的で。

私が幼子であろうと関係なく襲ってくる為、忌み子として扱われることも少なくは無かった。

…………という訳で。

死体を利用されない（魔術師なら利用する）のと不慮の事故が合つて意識が消失した際、刻印に刻まれた

魔術式

疑似人格型報復術式・メネスゼロ

…………ちなみに、語源は復讐の女神メネシスから引用している。

ちなみに神格は多少。

低級神位の神格が付いてしまったので御祓にて洗い流した。

…………ああ？

お前は誰？だつて？

…………ふむ。主人公が気絶しているのなら、語り部は誰だ？と。

…………たしかに。彼に示しが付かないな。

私は…………ふむ。私はカリオストロ、サン・ジェルマン、パラケルス

ス、トリスメギストス、ノストラダムス、クリスチャン・ローゼンク  
ロイツ、マグヌス、ヨハン・ファウスト……………  
そうだな。

君たちにはこれが馴染み深いのでは無いかい？

第四天・永劫回帰。カール・クラフトⅡメルクリウスと。

それでは。今宵の恐怖劇を始めよう。

主人公は……………ふむ。終わりを求め続ける哀れな人間  
だがその在り方。女神も気に入って居るのだよ。

それでは悦んで学びたまえ。

「……………君はこう呼んだ方が良いだろう？……………Der Zauber  
er, der den Stern vom Anfang tr  
▪gtよ。」

「…さしずめ、『真の愛には気がつかないと言った所か』」

「天宮市・展望台」

「あ……………ああ……………あ……………きようや？」

倒れる。十香押し倒すかの様に。

胸元からは鮮血とは程遠い黒く変色した血が、十香の制服を汚して  
いく。

十香にも解つたのだろう。

どうしようもないと。自分には彼を助ける手段は無い事を。

……………そして。

誰が彼を殺したかを。

「……………あ……………あああああ!!……………貴様らだな。恭夜を殺したのは!!」

瞳から滂陀の涙を落しながら、十香は銃を打った少女と近付いて  
きている憎きメカメカ団を睨む。

「……………そうだな。どれだけ。どれだけ恭夜が私を肯定しても。世界  
は。お前らは否定をする。」

空に椅子が浮かぶ。

十香が剣を手にし、椅子を二つに断ち切る。

「……………サンダルフォン・ハイレンシュタイレイグ塵殺公・最後の剣うああああああ!!!」

その声に応じる様に空は哭き、地面は抉りとられて、空に浮く。



椅子の台座の破片は手に持っている剣にまとわり付き、10mを越えるかのような大剣に変わる。

「…ああ。死んで滅んで消に尽くせ。殺して塵して殺し尽くす!!!」

「……人類よ刮目しろ」

「……かの者こそ。世界に厄災を運ぶ」

「……即ち精霊なり」

「……くっ！仕方ないわ。応戦よ!!……全員!!抜劍!!!」

ASTが、光る剣をとり、十香に切りかかる。

それでも、精霊は意に返す事無く、その少女の様な細い腕でも、ASTの斬撃を逆に自分の斬撃で打ち砕き、吹き飛ばす。

「……ミツケタ。」

精霊の意に答えるかのように、天使はその姿を変え、空を飛ぶ。

「貴様が……恭夜を殺した奴だな!!」

白髪の少女は顔を歪ませながらも、剣をとり精霊と剣を交える。

「……ふん。これを持って、恭夜の手向けとしよう。それでは死ぬ!!」

上段の切り落としは、人で有るのなら確実に、命を葬りさるには十分な威力をしていた。

「……されど。」

「……ご都合主義の怪物は今日を覚ました。」

精霊と少女の足元が発光する。

幾何学模様の光は、周囲一体を取り囲み、恭夜の体に吸い込まれる。

「……所有者の意識の喪失を確認。……原因。射殺と確認。復元術式起動。及びに報復術式起動。」

その口から紡がれる声は、恭夜の優しく暖かな声では無く、無機質で、殺意が混じるかのような声だった。

「……敵味方識別確認。……直接の原因は銀髪の少女と確認。及びデミ・フェアリーと確認。」

「……きょう……やっ……何をっ」

「……」アヴェスター” 起動。相剋して廻れ。擬・疑似創星図」

アヴェスター。拜火教。それは人類が始めて、手にした宗教で有り善と悪を最速で満たした二原論の極致。

どの世界でも、世界の最大公倍数を満たし、彼の素体以外で有る”人間” 以外に猛威を奮う。

「…………… 塵殺公。模倣完了。…………… 論理” 西洋神秘” の一種と確認。…………… 適応完了。顕現します。塵殺公。」

その言葉を唱えられた瞬間。

精霊が起こした破壊の風を大いに越える程の、暴風が吹き荒れた。

「…………… 報復術式より報告。敵対者で有る。大多数の人間の無力化に成功。…………… 精霊及びに恩恵持ちの復帰確率…………… 86.723%。」

「…………… 疑似人格より回答。報復を。顕現せし天使を持つて。」

「報復術式。了解。」

少女達が、風が止み空を見上げると、輝く3対の羽根を持つまさに天使となった恭夜？が空より見下していた。

「…………… きょうや？ 一体何を？」

「…………… 敵味方識別確認。…………… 回答。敵対者の殺害及び、死体の原子分解。」

「…………… それに私も…っ!!!」

「…………… 敵対者は…………… コロス……………」

細く彼が振りやすい様に整えられた剣は、太く大剣になった十香の剣を押し戻した。

「…………… 剣戦では、時間がかかると確認。……………」 擬・覇者の極光” の使用を。」

「……疑似人格より回答。：使用を認めず。NBCA兵器の具現化は、デイストピアの世界以外認めず。」

「報復術式。理解。代用案に、焼却式」の使用の許可を。」

「……疑似人格より回答。許可する。……但し、アルスマテリアル・サルモニスの使用は厳禁とする。」

「了解。」

「……平伏せよ。」

「……かの者こそ神代より生きし」

「……魔術師なり。」

## 十香ハツピーエンド

「フラクナシス艦内」

「画面復帰急いで!!!」

話は少し遡り、恭夜が射たれた所から。

見ていたカメラは、暴走した精霊の威圧により、回線が一時的に切れてしまった。

「……………まさか。一般人の近くで射つとは……………!!」

「琴理。今は状況確認に徹しよう。とりあえず、恭夜は生きているのか。そこからだ。」

「……………ええ。分かっているわ。」

令音は、その瞳に暗い炎を宿しながらも、悟られず解析官としての責務を全うする。

「……………画面復帰します!!」

スタッフの誰かが、叫んだ瞬間天宮市の高台が写し出されていた。

「……………嘘……………」

琴理は取り繕う事も忘れて、画面を凝視する。

「……………天……………使……………」

スタッフの誰かが、はたまた自分が言ったかわからない。

それでも今ここに居る全ての生命体が、それを天使と見た。

「……………恭夜よね?あれは……………」

「画面拡大します!!!」

拡大された画面に写るのは、肌全てに、光る線が入っており、まるで一つの魔方陣に見えていた。

「……………恭夜の目的は十香?」

「そうだろうね。斬りかかっている。そしてそれ以外に眼中にないと言ふことはそう言う事なんだろう。」

琴理は、普段絶対にしないしかめ顔をしながら、爪を噛んでいた。

「……………琴理。カマエルは起動しなかったのかい?」

「……………ちゃんとパスは繋いだわよ。それでもなお、回復能力は……………起動しなかった……………すべての機能がレジストされたのよ……………」

「そこは要相談だな。……もしこれ以上被害が拡大したらどうするつもりだ？」

「……私が出るわ。」

「その心は？」

「……私のグングニルなら。と言った所かしらね。」

「夢の中」

「……きろ……お……きろ……起きろ!!」

自分でもらしくない。他人を狙う弾丸を、自分の身で受けようとするなんて。

あの少女が、■■■の子達に境遇が似ていた？

……ふぎけるな。冷静になれ。自分。

無知は罪だ。私は外道の魔術師だ。

心なき道具と割り切れ。

かつて私が切り捨てたように。

……あの肉体は今、術式の暴走が起きているだろう。

あと半日もない。剪定事象により世界は切り取られ破棄されるだろう。

……今、私が戻ったらどうにかはなるが。

あの世界では魔術はあまり発展しなかった。

故に、戻るほどの”価値”は無いと判断できる。

「……起きろ!!」

……?

生と死の間の暗闇にて、1人の女性が立っていた。

その女性は何処か浮世離れた雰囲気を抱きそして尚、自分に笑うその女性は……

「……虞美人……？」

「……ええ。抑止の使い魔に落ちた真祖よ。」

人の姿をしてもその肉体は霊体であるその女性は”虞美人”。星の中から生まれ落ちた精霊の中で、唯一人として生きた真祖である。

個人的にも精霊と真祖のハイブリッドは珍しく、挙げ句人…の旦那

に娶られるなどその珍しさは結構今までに見た中でも100位以内には入る。

彼女の旦那である”項羽”は結局、道半場に死に絶え、その後は関わる事が無かったためとつくにくたばったのかと思っただが……

「……人を嫌うあんたが抑止の使いになるとはね。」

「ええ。まあ色々と有ったのよ。」

「……………成る程。」

俺はそれを聞きながら、星の情報を読み取る。とある世界線。

天の彼方より現れた神霊が世界を白紙にして違う世界のテクスチャを張り付けた。

張り付けられたテクスチャは棄てられた世界。

……それならば確かに彼女がその手を借りることも可能だ。

不死者で有りながら、誰よりも”死”を引っ張るのは中々お目にかかることのできない事柄だった。

「……………成る程。余程切羽が詰まっているらしい。」

人類の反逆者。

神霊の手先である存在が有りうるべからず世界線で世界を書き換えているのが現状らしい。

人類の理から背き、”人類の敵”である私ですら力を借りるほど切羽が詰まっているらしい。

もしくはその異界の神に私が手に貸すのを恐れているのかもしれない。

「仕方ない。か……」

あんなものの手先になるぐらいならば、まだ生きてほうがマシだ。

それに、あんな蝟だかゴスミックだか双頭の蛇だか分からん奴に従う義理もない。

「……………貴方ならそう言うと思うわ。”よい旅路を”」

「ああ。」

意識をまた自分の身体（暫定）に跳ばす。

……あの世界がどうなるかは私の知った話ではない。

だが、せめて良い旅路を。

とだけ祈った。

まあでも結構神秘が強かったからあの世界を失うのは少々惜しいかもしれない。と思いつながら。

まあ平行世界の主流だから別にまあどちらでも良いかと半分忘れながら。

「十数分前・天宮市」

「……………デミ・フェアリー及び、”恩恵” 持ちの復帰を確認。……………それ以外の敵対者の姿を確認出来ず。」

「報復術式より報告。……………焼却式の起動準備終了。繰り返す。焼却式の起動準備終了。」

「疑似人格より回答。……………起動。”永転局” 起動。……………数多の絶望。幾多の希望をここに。」

『『疑似・焼却式”メネスゼロ”』』  
焼却式メネスゼロ。

その名の通り、かつて何処かの次元で、運河逆行を行おうとした群体の奥義。

それは、世界に炎を産むのではなく、虚数よりその炎を産み出す。数多の絶望、幾多の希望。

その対極の感情より、産み出されし炎は、出力を大幅に削り、範囲を全力まで狭めても、人を廃人にするには多すぎる感情だった。

「……………あつ……………」

「ぐあああ……………」  
だが。この攻撃には例外が存在する。  
少女達は、元々感動を司る機構が人より鈍かった。

まあそうだろう。  
そもその生まれが歪で、情緒など育たぬ世界で生きた少女と壊れてしまった少女だ。

もとより精神がまともではない少女が喰らっても効果が無いのは

道理の話だ。

「……………疑似・焼却式の効力半減。他の手順を利用することを推奨。」  
「報復術式より回答。黒き盃の使用を考慮する。」

「疑似人格より回答。認めず。認めず。この世界に”ビースト”を呼ぶ呼び水になりかねない。簡易な使用は考慮に入れない。」

「報復術式より回答。理解。理解。ならば魔術式”擬・羅刹穿つ極光”の許可を。」

「疑似人格より回答。許可。五秒の猶予を持つて使用を開始する。」  
「報復術式。了解。”擬・羅刹穿つ極光”発射まで残り五秒。」

ブラフマーストラ。

それは古代インドでの必殺技と言わんばかりの技。

ブラフマーの加護を用いて放たれる一撃。

それは魔王を殺し、そして大英雄である者達が使った由緒正しい一撃。

極光が魔術式と共に現れ、疲労して動けない二人に照準が合わせられる。

「……………きょー……や……………」

「……………」

十香も折紙も避けられない事を悟ったのか、諦め混じりで空に輝く高速で回る小さな光の円環を眺める。

一秒毎に、満ちる魔力の圧力は増えて天を揺らす。

今この場に置いて、精霊の混ざりものだと言う出来損ないでは何も出来ないだろう。

「……………照準確定。発射。」

チャクラムのように投げられた一撃は、歯車が高速で回転するような不快な音を立てて、こちらに向かってくる。

少なくとも、少なくとも衝撃を殺そうと震える足を押さえながら二人は武装に力を込める。

もう二人には避ける気力もこれを完全に押し返す力もなかった。  
だが。

ここでようやく。



魔術師は目を覚ました。

「……………あ……………」

「……………ぐなあ……………!!」

「え？これどういう状況？」

どうにかして受け流せないかと無言の協力を行う二人の元に、魔術式を仕舞った恭夜が現れた。

「……………?!きよーや!!」

「!時雨…恭夜!!」

「……………うん？ブラフマーストラ？……………つて俺か。」

魔術式が仕舞われた事により術式の維持が出来なくなり、大河の様な量の魔力は光のような弾に変わり降り落ちる。

「きよーや!!どうするのだ?!」

「……………あ……………俺が撒いた種か……………」

現状を把握仕切ったのか。

恭夜はとても苦々しい顔で空を見上げる。

(第一弾が着弾するまでおよそ6秒半。壁を作るのはもう面倒だ。……………迎撃して破壊した方が速いか。)

幸いにも威力はそこまで高くないしな。と頭の片隅で考えながら、天に掲げた右手にはブラフマーストラ以上に幾何学的模様の魔方陣が現れた。

「……………ra……………ra……………ra……………」

歌うかの様に紡がれたその圧縮詠唱は瞬く間に、魔方陣が反応した。

魔方陣は拡大し始め、その拡大した魔方陣からは多くの光の玉が溢れ出る。

まるで指揮を執るかの様に踊る彼は正しく今はなき魔術師の姿であつた。

「……………まあこんな感じか。」

最後一つの光の玉を相殺させて彼は魔方陣を消した。

この時。確かに現れたのだ。

神秘が無くなり久しい現代に。

”本物”の魔術師の存在を。

? | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ?

〔数十分後〕

自分の暴走が収まり、精霊以上の暴走を行い、ASTに精霊を上回る恐怖を押し付けてしまった。

「……すまないな。折紙。」

「大丈夫。」

折紙にしては、被弾させてしまった相手に謝れるのだ。その心は少なくとも簡単には推し量れない代物だろう。

「……さてと。」

恭夜は十香に向き合い、こう言い張る。

”精霊の力を封印する事が出来るのならばどうしたい?”

「……本当にできるのか……?」

「ああ。」

恭夜は考える。

キス。もつと言えば経口契約。

瞬間契約の類いだが、最も効力のある方法ではない。

肌の接触：延いては”体を用いた魔力の接続”だ。

それを行うというならば、魔力である血液や精○を契約者から被契約者に飲ませてやれば良い。

それでも駄目ならば自分の血肉を食わせてやれば良いし、人型であるのならば穴も有る。性交渉を行ってしまえば良い。

だと言うのに、唾液だけで行うのはあまりにも経路を築き上げにくい。

……もしやその可能性もなきにしもあらずなのだろうか。

「完全出来る訳ではない。挙げ句”これ”で出来るのならば世も末だ。」

世界を滅ぼしうる可能性を秘めたある意味ビーストよりもつつましい少女の力が、キスだけで封印を行える……?

どんな童話だ。魔術師が一齐に悲鳴を上げるわ。

……それでも腹立たしいが、しばらくはこれ以外の方法は探しようが無い。

「それでも掛ける価値はある。」

彼女たちの力の原水。核ともとれる拳大の結晶か何かを抜き取れば終わるかもしれないが、その場合どういった効果をもたらすのか想像も付かない。

「答えろ。十香。”安泰”を望むか。”壊劫”を望むか。」  
「どちらも茨の道だ。」

安泰を望んだとしても復讐鬼に落ちた被害者は例え、相手にどんな事情が有ろうとそれを害しに来る。人間とはそういう生き物だ。

壊劫を望むのならば、戦い続けると言うことだ。

信じることを捨て、最後には自分すら見失う。出来た幸せも最後は失い。そして亡者と化する。

……どちらも最悪だ。

私はあの時、”壊劫”を選んだ。

……こいつはどっちを選ぶだろうか。

「……きよーやは……壊劫を選んで後悔しているのだな。」

「……………さあな。」

ああ。やだやだ。

こう言った幼子にはたまに居るのだ。謎に共感能力が高いやつが。

こういった存在は酷く自分のような存在を決ってくる。

「私はきよーやと一緒に居る。」

「そっか。」

「うむ。」

自分は何処かで願っていたのだろうか。

十香が壊劫を選び、醜く穢れ堕ちたその時に……利用することを。

「……契約方法は経口接触。簡潔に言うときスだ。」

「……………キス……？」

そうか。こいつは子供だった。

そんな事を知るよしもない。

瞳を閉ざさせ、口と口を合わせる。

……この世界での始めてのキスは何故かほろ苦い様な気がした。

「……………!?!」

「は?」

経口契約を行った直後。

確かに何かしらの力が十香から自分に動いた。

……だと言うのに、それは今の自分の裡の内にはない。

例えば、その精霊の力が濁流程の力だとするのならば、それは宇宙にとつて一粒にも満たないであろう。

それでも魔術師なのだから自身に流れてくる魔力の程は分かるはずだ。

だと言うのに自身がその力を吸収した瞬間、その力は消えていた。

(……………だが。縁は繋がれた)

あまりにも細すぎて今にでも千切れ落ちそうな位の縁だが、それでも結ばれた。

(……………非常に癪だが。)

もつと大量の、そして大人数の力を吸収しなくてはならない。

そうしなければこの物語の核心

には至れない。

それがこの演劇の糸を引いている”何か”が求めている事なのだろう。

「……………仕方がない。」

産まれたままの姿をしている十香に錬金術の重ね技で擬似的な服を作る。

あくまでも擬似的なので精霊の纏っている礼装擬き程ではないが銃弾レベルなら跳ね返せる。

「きよーや。これから宜しくなー!」

満の笑顔である十香を見てしまうとどうしても今まで失ってきた何かを思い返してしまい、直視が出来なかった。

## 十香アツトエンド：裏

女神は盤上を見て小さくため息を付きます。

シナリオ通りに”王国”は封印され、次は”慈悲”の所まで来ました。

更なる精霊を”彼”に当てても良いですが、そうすると彼に全ての秘匿がバレてしまいます。

女神は少し考え、白いコマを2つ動かします。

女神が産んだ神の子であり、そして忌むべき子です。

”片方”はスペアとして機能していますが、もう片方は特に大きな役割は持っています。

女神は少し小さめの片割れのコマを転がし、相手の陣地に置きます。

女神は一応は安心しますが、それでもまた心配が残ります。

女神は手元に有るコマに力を込めます。

(……………)

確かに、女神様はこの単一宇宙下ならば最強と呼べる存在ですが、彼には敵いません。

彼が一度法則を流せば、自分なんて簡単に砕け散る事を知っています。

それに、彼にとってどんな小細工は簡単に砕けてしまいます。

彼に興が乗り、放置してもらわないと、今まで作り上げた策なんて一瞬の内に解体されてしまいます。

機械仕掛けの神も、■■も何もかもあの”超越者”には効かないのです。

それゆえに、女神様も完全に策を作り上げます。

彼を必ず■■■為に。

今度こそ逃がさない為に。

その為には、あらゆるものを利用することすら厭わない。

必要以上に力がこもってしまった手元の駒を見て、やってしまった



・精霊の力の封印

この2つである。

確実な裏取りがとれているわけでもなく尚且つ、単騎で世界と戦争出来る怪物だ。その力を封印出来るなどにわかに信じがたいことだった。

それに、今まで隠されていた恭夜の秘密は上層部にとつてとても素晴らしい事であった。

『だが”古の術”を使えるのだと言うならば』

『うむ。対応を考え直さねばならん。』

「？」

琴里の頭の中では？が浮かんでいるが、次の上層部の一言に琴里は静かに驚愕した。

『やはり封印指定が必要かの？』

そこまでする必要は無かろう。

だが今反逆等起こされたら次こそ壊滅だろう。

性格は魔術師にあるまじき善良。

いやしかし必要があれば。

そう騒ぎ立てる周囲を尻目に、一番前の偉いヒトらしい声が重々しく伝わる。

『……古の術を使う。それはこの世界ではもう失われた技術である。』

『さよう。だがあの少年は確かに”ルーン”を使っていた。』

一切のラグ無く、さらには超高等技術である”圧縮詠唱”まで行われた。

この世界には、古き神代の息吹きは喪われ、”魔術”に変わる機械まで現れた。

この時点で、神秘は非常に黎落し、”魔術”と呼ばれる代物ははるか昔の話になってしまった。

その名かで尚、昔の技術を使いそれでいて”色位”であつてもおかしくはない。

……未だに彼の全貌は掴めていないが、もしあの暴走した時に更なる技を使っていれば、”冠位”が与えられていてもおかしくはなかつ

た。

逆に裏を返せばそれほど危険なのだ。

猛獣が檻に入らず町の中で腹を空かせているというレベルですら生易しい。

『……逆に懐柔するか?』

使う術がどの様な物であれ、古き術を扱うものならばその血を取り込みたいのは日本の者だけではない。

古くからの魔術師の総本山”イギリス”に残る魔術師だってそうだし、北欧の上の方もそうだ。

「待ってください。」

琴里にとつても今回の事態はあまりに希な出来事過ぎる。

と言うか希と言うレベルではない。

何気なく上に提出したこういう力が有るみたいですよ。そしてそれをこういう様に使ってみましたよ。と簡易的に纏めただけなのだ。

だと言うのに、いざ蓋を開けてみれば封印だとか色々と親しい兄が人権すら無視された扱いをさせられそうになる。

ここで琴里は一つ大きな間違いを犯してしまった。

自身が精霊で有ること、そしていつも関わっている異常が精霊と言う文字通り人智を越えた存在を相手にしていた事が問題として浮き彫りになった。

「そうすると………」

具体的に言うと、琴里は凄く頑張った。チョー頑張った。

ただでさえ、精霊は感情の振れ幅が人間より大きいのにここでまたやんごとなき事態が発生したとなるとすべてが水の泡だ。

……只でさえ、色々と精霊の対応も有るというのに。

『確かに一理有るだろうな。』

最終的に無期限延長となった話だったがその変わり、この場所に彼を連れてくることを約束させられた。

……何故だろうか。始めからそれが目的の様に感じてしまうのは。



「……………」

未明。恭夜は一人レポート用紙片手に深く考えに潜り込んでいた。

(精霊の存在)

そもそもこの世界では確かに存在していたはずなのだ。

自然の触覚の”本当の精霊”が。

だというのにこの世界には、”デミ・フェアリー”いわばヒトから変異したであろう精霊をしか知覚した覚えがない。

(……………英霊召喚システム)

過去の英雄を現世に止まらせるあらゆる願いを叶える願望機。

”聖杯戦争”。

…………とは言っても原点の杯の出来損ないで叶えられる願いなど高が知れている。

不老や、あり得ないほどの富。

そして霊体の受肉。

出来てその程度だろう。

”歴史改変”などパロドックスに引つかかる。

行えるのは…きっと”あれ”と”月の観測機”位だろうか。

話は逸れたが、結局は”契約”と言う側面では広く見れば同じだ。

それが霊体か肉体か物言わぬ武器かの些細な違いは有ろうともそこに違いはない。

確かに契約は行われた。行われたのだ。

だというのに違和感が激しい。

違和感が有るといいうのに上手く思考が纏まらない。

…………どう考えても何か掛かっている。

おかしい。おかしい。

魂が侵食されている訳でも何か宇宙の果てから蛸だかなんだかが干渉してきているわけでもない。

……そもそもおかしいぞ。

この計画には五河士道だけでも良かった筈なのに。女性同士になるが基本どこでもよくある事だ。

だというのに私が駆り出される理由……わからん。

いや。理由が思い付きすぎて分からない。

「……質問。起きてますか？」

「ああ。起きてるぞ。」

どうやら夕弦が部屋を訪ねてきたらしい。

書きなぐったレポート用紙を机にしまい、ドアを開ける。

何時ものような普段着や精霊時の礼装ではなく、いつもの青色のネグリジエを着て私の部屋に現れたらしい。

どうにか慎みをもって欲しい物だ。

夜分にこうして一人で男性の元に現れるなど、時代と地域によってはお誘いの様にも聞こえるぞとは胸に流し終えた。

「どうかしたか？」

「本題。……きつと分かっているんでしよう？」

「それはお前たちが一つの精霊という事か？」

声もなく頷いた夕弦を見て、成る程なと思った。

こいつらの存在はそもそも一つの存在。

オリジナルから派生した別側面……アルターエゴだけが動いている状態だ。

とは言っても月のお人形ほど破綻しているわけでもなく、ただどちらかがオリジナルに近いかを争って今だ。

「恐怖。こわいのです。」

夕弦は静かに語る。

今の幸せのせいで何もしたくなくなるかの様な幸福感に溢れること。そして、恭夜に嫌われたらエラーしか吐き出さなくなるこの心に心底夕弦は恐れているのだ。

「成る程ね……」

人形が愛という物を学び始めた。

これはもう私の手には負えない。

月のお人形よりは出来が良いが所詮同じ穴の貉だ。

結局は感情を薪に自壊しながら死にむかうお人形風情。

わざわざ自分から沈むと分かっている泥船にのるバカは居ない。

天使と呼ばれる礼装が”風”を司るから丁度良いかと調整を掛けたのが不味かったか。

あの時放置していればきつといずれかは自滅していただろう。

それはそれでも良かったな。

あの時の自分は素体はこいつら以外に居ないだろうからと面倒を見ていたが、へフラクシナスだっただか？あれに関わるならもつと大量のサンプルが手にはいるだろう。

適当な所で流すか。

あとは勝手に競い合い、自滅するだろう。

ああ。そうそう。自滅した時一体どうなるかだけは把握しないと。

結局あれは結晶が作り上げた別側面なんだからそれが砕けた際結晶に吸収されるのか果たして、魔力として世界に霧散するのか。

……前者が大穴だな。

「……大丈夫。きつとあの時運命を踏み越えた君ならね。」

魔術師と無垢な天使は笑い合う。

ただ皮肉なことに魔術師はもう天使の事などすでにあたまに無かったのだから。

? | ? | ? | ? | ? | ? | ? | ?

「……はあ……」

五河士道は一人静かに横になりながら思案に更けていた。

士道にとつて恭夜のその何かは多少は感づいてはいた。

兄のようで、片親のようなそんなヒトだった。

それはどちらかと言えば”信仰”に近い。

(今日は特に色々と合ったなあ……)

きっとそうなのだ。

彼から”魔法”の説明は受けているが、それでも半信半疑だった。きっと私がそれを美しいと思ったのは恭夜が暴走した時。すべてが燃え尽きるかの様なそんな暴虐。

きっと私のこれは憧れだ。

確かに圧倒的な暴力は時にどんな美しさを圧倒したのだから。

「……精霊……かあ……」

恭夜と私にしか無い才能。

”精霊封印能力”。

きっといずれは私もその能力を使わざる負えないだろう。

その時にしか分からないだろうけどそれでも恭夜の意味になりた  
い。

……今日は色々と有った。

ゆっくり休むぐらいは許されるだろう。

土道は最後まで気がつかない。

その瞳が一部赤く光っていたことなんて。